

## まえがき

この本は外国と深く関係している。私が学生の頃、西洋哲学を学んだのは、外国の人々の思うことを知りたいためであったが、なかなか西洋哲学の考え方になじめなかった。そこで一度は西洋哲学を断念し、「もの思い」をすることにした。それは日本の西洋哲学が、欧米語を中国語（漢字熟語）に訳した用語で考えるため、日本人の頭のなかにしつとりと入ってこないと思ったからである。

その後、もの思いして、その成果は歌で表すと考え、私はずっと詩歌の道を歩いてきた。あたりまえのようだが、「哲学」をやめ、「もの思い」することで、私はよくものを思うことができるようになったと思う。

五行歌もまた、そのもの思いの成果だったと、私は思っている。

五行歌人たちの素晴らしいもの思いの成果は、いつか世界を動かすだろうと私はひそかに思っていたが、英文の本を出し、五行歌を世界に紹介してみると、この本を読んだ人々が、「日本人のように深くもの思うことはわれわれにはできない」と言

いはじめた。

これには驚かされた。

同時に、日本の五行歌にある思いは、かならずしも日本的な思いではない、とま  
でいわなくてはならないことになってきた。もの思いは日本的な思い方ではあるが、  
思っている内容は世界共通の問題である。とくに現代人としての思いは、ことごと  
く欧米の考え方に基礎がある。

このように、私の思いの論は、日本へ戻ったり、向こうへ行ったりする。考えて  
みると、思想も文化も国際化していて、もの思いもまた東西を行ったり来たりして  
いるのが正しいとも言えるのである。それはようやく世界が共通の場を持ち始めて  
いるということであろう。

さて、私は、詩歌とは思いを書くものだ、いままでの五行歌に関する本のなか  
でもずっと述べてきたが、私がそう思うに至った道程については、まだ文章にして  
いなかった。草壁塾という五行歌人たちに対する長期講座では、四、五時間もかけ  
て話したことはある。

私は、こういう思いは、文章にしないほうがいいものかと、思っていた。それで  
本を書くと、構築物のようになって、間違うのではないかと、思われたからだ。古

の聖の思想は構造化しておらず、瞬間瞬間に生きているような形で現れていることが多い。

そのほうが正しいのではないかと、思っていたのだ。しかし、私は外国の五行歌人のために、思うということについて説明しなければならなくなってきた。というのも、外国では、五行歌は短歌から自由化したものといっても、短歌というものがわからないので、何の意味もなく、日本では意味のある五行歌理論も、向こうではまったく意味がなくなってしまう。

すると、五行歌とは何かについて、私はもの思いの論を展開するしかなくなってくるのである。実際に「思い」について説明もした。しかし、彼らは本がほしいという。

彼らがそこまでいうのは、五行歌のよさを十分に感じているからである。

私は、その『もの思いの論』を書くことにした。もちろん、最初は日本語で。

詩歌は思いを書くものだということは、五行歌人たちはしばしばいう。これは、十分伝わっているということが出来る。しかし、その根拠などについては、草壁塾にきた人など一部の人々を除いてはあまり知らないだろうと思われる。

こうして書いてみたのが本書であったが、私は書いてよかったとつくづく思った。

書くことによって、自分のいままでの『もの思いの論』は、いろいろ矛盾も含み、かつ不足な点もあったことに気がついた。

悔しかったが、修正した。また、書くことによって、いくつか新しいアイデアが湧いた。書くことによって、明らかに私は進歩したのである。こういうものは、本にすべきでないなどなぜ考えていたのか、たいへんな間違いだったと今は思う。

本書は、最初の「思い」の本であるから、最も基礎的なことについて、述べておく必要があった。第六章までは、その基礎論のようなものである。第七章以降は、実践論、応用編のようなものであるが、古典詩歌論などは書けなかった。しかし、人間、宇宙、時間、文化などについては書くことができた。

最初、この本は二百三十頁くらいにするつもりだったが、いつのまにか膨らんでいった。

それも仕方がない。あまり難しくない、わかりやすい本にするという目標も持っていたが、読み返して見ると、すこし読みにくいところもあるかもしれない。

こういう本にしてはいいほうだろうとは思いますが、人間の内面をテーマにする、ある程度は仕方がないことであろうか。

いや、人間の内面はいちばん面白いことなので、やはり書きようが悪いのかと、

反省はしている。水源純君のマンガは、私の文章とのセットでたいへん好評なので書いてもらった。装丁は井椎しづくさんに、製作は吉野比抄子さんに、チェックは叙子と悠木すみれさんにと、日頃のスタッフといっしょに仕事ができ、嬉しかった。哲学をやめて、もの思いをしようと思ってからもう五十年近い月日が経とうとしている。西洋哲学科学生としての一種の挫折から、もの思いへ還り、そのもの思いについて外国で問われてこういう本を書くことになった。

半世紀経って、やっと正式に、一冊の本として、自分の考えを表すことができるようになった。私は幸運だったとしみじみと思う。

二〇〇九年九月二十日

草壁焰太